

## 『竹取物語』 「月の顔見るは、忌むこと」 再考

——『万葉集』の月の和歌を通して——

石 樽 紗 和

## はじめに

『竹取物語』における月とはなんだろうか。それは「月の都」がある場所であり、かぐや姫の昇天先である。しかし、一方で「月の顔見るは、忌むこと」と月見を忌む思想も存在する。夜間における光源であつた月は、奈良・平安時代の人にとつて、見てはいけないものであつたのだろうか。本稿では『竹取物語』の「月の顔見るは、忌むこと」という禁止の意図を、『万葉集』に詠まれた月を通して考えたい。

以下、『竹取物語』における天体の月の用例、十七例<sup>①</sup>を列挙する。

かぐや姫、月を見始める。(五一頁)

春の初めより、かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人間にも月を見ては、いみじく泣き給ふ。

かぐや姫、七月十五日になつても月を見る。(五二頁)

七月十五日の月に出で居て、せちに物思へる気色なり。近く使はるる人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがり給へども、このごろとなりては、ただ事にも侍らざめり。いみじく思し嘆くことあるべし。よくよく見奉らせ給へ」と言ふを聞きて、かぐや姫に言ふやう、「なんでふ心地すれば、かく物を思ひたるさま

にて、月を見給ふぞ。うましき世に」と言ふ。

翁、月を見続けるかぐや姫に声をかける。(五二頁 五三頁)

翁、「月な見給ひぞ。これを見給へば、物思す気色はあ  
るぞ」と言へば、「いかで月を見ではあらむ」とて、な  
ほ月出づれば、出で居つつ嘆き思へり。夕闇には、物を  
思はぬ気色なり。月の程になりぬれば、なほ時々はうち  
嘆き、泣きなどす。

かぐや姫、月を見る理由を話す。(五三頁 五四頁)

八月十五日ばかりの月に出で居て、かぐや姫、いとい  
たく泣き給ふ。(中略) かぐや姫、泣く泣く言ふ。「さき  
ざきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむもの  
ぞと思ひて、今まで過こし侍りつるなり。さのみやはと  
て、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この国の人にも  
あらず。月の都の人なり。(後略)」

かぐや姫、月の都に帰りたくない自身の気持ちを話す。  
(五四頁)

かぐや姫のいはく、「月の都の人にて、父母あり。片  
時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国

にはあまたの年を経ぬるになむありける。(後略)」

翁、かぐや姫に迎えが来ることを帝の使いに伝える。(五  
五頁)

竹取、泣く泣く申す、「この十五日になむ、月の都より、  
かぐや姫の迎へにまうで来なる。尊く問はせ給ふ。この  
十五日は、人々賜はりて、月の都の人まうで来ば捕へさ  
せむ」と申す。

天人、大空より降りてくる(五八頁)

かかるほどに、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家の  
あたり、昼の明かさにも過ぎて光りたり。望月の明かさ  
を十合はせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆる  
ほどなり。

かぐや姫、翁に文を書き置く(六十頁 六一頁)

この国に生まれぬるとならば、嘆かせ奉らぬ程まで侍  
らで過ぎ別れぬること、かへすがへす本意なくこそ覚え  
侍れ。脱ぎ置く衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は、  
見おこせ給へ。見捨て奉りてまかる空よりも、落ちぬべ  
き心地する。

このうち、かぐや姫が翁に書き置いた文にある、「月の出

でたらむ夜」以外の「月」十例と「月の顔」一例はその場面において地上から見える月を指しているが、これらはすべて、かぐや姫が見ている月か、「月な見給ひそ」のように、かぐや姫が見ている月について、他の登場人物が言及する際のものである。天体の月を表す語は、帝の求婚があつた三年後の春から、かぐや姫が昇天するまでの短い終盤の場面のみ表れるのである。

かぐや姫から「月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ」と文を残される翁と姫は、月を見ない。「いづれの山か天に近き」と言つて、不死の薬を焼かせる帝も月を見ない。「竹取物語」には、単に空に浮かぶ月は本文に描かれず、描写されるのは、かぐや姫が見ている月だけである。かぐや姫だけが月を見て「いみじく泣き」「物思へる気色」とであると描かれる。

本稿では、以上の月の用例を踏まえて、「月の顔見るは、忌むこと」について論じる。また、『万葉集』の月の歌一九首から、古代の人々にとって月がどのような存在であつたのかをふまえ、『万葉集』の月と比較しつつ『竹取物語』における月について考察する。

## 一 『竹取物語』における月の先行研究

『竹取物語』において最も印象的な月の用例は「月の顔見るは、忌むこと」であろう。三谷栄一氏は「月の顔見るは、忌むこと」について、次のように述べている。<sup>①</sup>

「顔見る」は月を擬人化した表現。美しい月を眺めるのは昔から忌み嫌ふことである。源氏物語、宿木巻にも「老人どもなど、今は入らせ給ひね。月見るは忌み侍るものを……などいふ」とある。後撰集、恋部の読人知らずの歌にも「月をあはれといふは忌むことなりといふ人のありければ」と詞書のある「独寝の侘びしきままに起きみつづ月をあはれと忌みぞかねつる」という歌が見える。これらは当時広く読まれた白文子集「莫下対月明」思中往事上損君顔色減君年」などの影響か、或いはこの時代に信仰された俗信であつたかであろう。しかし現在諸地方にこの信仰がまだ生きている事実には、日本の民俗と考えてよからう。一体古来忌まるものには、通例清浄過ぎるものが多い。余りにも神聖視されて、神の

ものと考えられたのである。(中略) 月も同様な清白な面に靈威を感じたのは、祭の夜以外は見てはならないものとした日本古来の俗信でもあったのであろう。

更に「民俗の方面から考察してみる」として、日本各地の月を見ることに關する俗信を調査し、「三日月から八日月あたりまでを殊の外に忌んでいることがわかる」としている。また、月と月経に關する俗信を挙げて「日本にもそんなところからか女性の月を見るのは殊の外忌まれたものである」と結論づけている。<sup>(3)</sup>

三谷氏が紹介する月を忌むことの典拠は二つに分けられる。一つは日本古来の民間信仰説である。この説には、民間信仰として月見を忌む俗信があったと考えるものと、月と月経とを關連付けて女性が月を見てはいけなくと考えるものがあつた。<sup>(4)</sup> もう一つは、『白氏文集』「贈内」を根拠とした中国由来説である。

二つ目の中国由来説について考えるにあたって、根拠となる『白氏文集』「贈内」の本文を確認する。<sup>(5)</sup>

『白氏文集』卷十四<sup>796</sup>「贈内」

漠漠闇苔新雨地 漠漠たる闇苔 新雨の地、

微微涼露欲秋天 微微たる涼露 秋ならんと欲する天。  
莫對月明思往事 月明に對して 往事を思ふ莫れ、  
損君顔色減君年 君が顔色を損じて 君が年を減ぜん。  
この漢詩が「月の顔見るは、忌むこと」の根拠となるのは、第三句・第四句の表現による。このことについて、熊谷直春氏は次のように述べている。<sup>(6)</sup>

『竹取物語』において、「月の顔見るは、忌むこと」の理由について、確かに明確に述べられていない。しかし、この禁忌を出した後に、かぐや姫と翁を造型するにあたって、その理由となる「損君顔色減君年」ばかりか「思往事」まで欠けることなく使っているところを見ると、やはり作者は、右の禁忌が『白氏文集』の詩句に由来することを、十分知っていたと思わざるをえない。また、倪錦丹氏も次のように『白氏文集』の影響について述べている。<sup>(7)</sup>

月見を忌むことは、土俗の信仰であるというより、むしろ、『白氏文集』(卷十四「贈内」)の「月明に對して往事を思ふこと莫れ 君が顔色を損じ君が年を減ぜん」の影響を受けた結果と見たほうが適切だと考えられる。

一方、三浦真貴氏は、『白氏文集』「贈内」に月を忌む思想を見いだす考えに反論している。<sup>⑧</sup>

中国において、「月を見て悩むと年を取る」、というものが信仰によるもの、または思想で存在していたならば「忌む」が使われることも納得できるのであるが、中国では古代より月は嫦娥という仙女や蟾蜍、兎の住む天界の一部であり、また月は不老不死の薬との関わりの深いものであり、老けるといった思想は見られない。また、白居易自身だけではなく、同時代の詩人たちも見て愁う詩を詠んでいることから「月を見て悩むと年を取る」という信仰は無かったと思われる。

そして、「贈内」で月を見てはいけないとしているのは、「月を見て悩む妻に対して、それではより悩みが深くなる、悩みすぎると老けるよ、とそのような意であるように思われる」と結論づけている。

『竹取物語』の月を忌む考えについて、「贈内」が影響を与えた可能性は否定できない。しかし、第三句・第四句の意味は、三浦氏の指摘のように、「月を見て物思いに耽りすぎるのは君（妻）にとってよくない」程度であり、月を忌む思想

までを見いだすことはできないのではないだろうか。「贈内」と『竹取物語』の設定は類似するものの<sup>⑨</sup>、かぐや姫が月を見て思うのは「往事」とは言いがたい。「忌む」という表現を持たない「贈内」を直接の典拠とするには難しく、月を「忌む」とするのは『竹取物語』独自の発想の可能性があろう。そう考えると、月を忌むというのは、日本にもともとあった民間信仰と『白氏文集』「贈内」に影響を受けて『竹取物語』に現れた発想であると考えられる。民間信仰と『贈内』の両方が影響しているということは、すでに大井田晴彦氏が次のように述べている。<sup>⑩</sup>

古来の土俗的な発想に「月明二対シテ往時ヲ思フ莫レ、君ガ顔色ヲ損ジテ君ガ年ヲ減ゼン」（『白氏文集』巻一四・贈内）のような中国的な思想が結びついたものである。民間信仰と『白氏文集』の両方が影響しているという考えは首肯される。

しかしながら、民間信仰説についてももう少し踏み込んで考えたい。なぜなら、男性貴族によって書かれたとされる『竹取物語』の成立当時の都周辺に、これまで見てきたような民間信仰があつたかどうかは、否定も肯定もできないからであ

る。三谷氏によって収集された俗信に、奈良県もしくは京都府のものとは確認できず、もし現代まで残っている俗信が確認されたとしても、それが当時の都周辺にあったという証明は不可能である。例えば『万葉集』に、月を見てはいけないものと詠む歌があれば、平城京周辺に俗信があったと言えるかもしれないが、そのような歌はない（この点については二で詳述する）。日本各地に俗信が確認されることを理由とした民間信仰説によって証明できるのは、月を見ることを避ける考えが生まれ得たかもしれないということだけだろう。

では『竹取物語』以前の社会において、「月」はどのように捉えられていたのだろうか。この点を考えるために、『万葉集』の月の用例を調査し、『竹取物語』の月との関連があるかを考察したい。その前に『竹取物語』研究において、『万葉集』はどのように扱われているか確認する。

『竹取物語』と関連のある『万葉集』の歌として一番に挙げられるのは、巻十六「竹取の翁の、偶九箇の神女に逢ひ、近狎の罪を贖ひて作りし歌一首」と「娘子等の和せし歌九首」の三七九一から三八〇二の歌である。奥津春雄氏は、八月十五夜に昇天することの素材を探す中で、次のように述べてい

る。<sup>⑪</sup>

しかるに、この中秋明月の昇天と月の都への帰還とが、今日までに報告された竹取説話の類に全く現われないのは注目すべき事実である。『竹取物語』以前のものとしては、『萬葉集』巻十六の竹取翁の歌があるが、（中略）時も舞台も全く異なり、月との関連は求むべくもない。

指摘通り、これらの歌の中で月は出てこない。そこで、『万葉集』の月が詠まれている歌は『竹取物語』とどう関連付けられているのか、あるいは関連がないのかを、『万葉集』において月が詠まれている和歌についての先行研究から見ていきたい。<sup>⑫</sup>

3245 天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月読の 持てる  
をち水 い取り来て 君に奉りて をち得てしかも

985 天にます月読をとこ路はせむ今夜の長さ五百夜継ぎこそ  
2010 夕星も通ふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人をとこ

三三四五番歌は、月と「をち水」が共に詠まれている集中唯一の歌である。九八五番歌と二〇一〇番歌は月を擬人化している歌である。「月読をとこ」は他に一例、「月人をとこ」は他に四例ある。これらの歌について高橋亨氏は、次のよう

に述べている。<sup>(13)</sup>

『万葉集』に「月読壮士」や「月人壮士」を詠んだ歌や、月の「変若水」を詠んだものがあるのも、月と不老不死や再生とを結合した、前記のような中国的な発想に学んだきらいが強い。それらにはしかし、月と女性との結びつきがみられない。

月と不老不死や、月を人に見立てる歌の内容は『竹取物語』との関連が見いだせそうではあるが、物語成立のための直接の素材となったとまでは言えない。

では、その他の月を詠んでいる歌について、先行研究での指摘を確認していきたい。まず、加藤幸恵氏は次のように指摘する。<sup>(14)</sup>

次に萬葉集を見ると、四千五百首の中に月を詠みこんでいるのは約百七十首程である。これだけ見ればずいぶん多いように思われるが、直接月を詠んでいない歌というのが非常に多い。結局、月を直接詠んだと思われるものは、二十首に満たない。

山下春美氏も『万葉集』で詠まれる月について、次のように述べている。<sup>(15)</sup>

月を詠んだ歌の総数は、二百首近くもあり、文学の素材として、月が定着していたことがわかる。(中略) 万葉集中に詠まれた月は多くあるが、必ずしも月そのものを直接に詠んだ歌ばかりでなく、むしろ月と重ねて他の内容を詠むことの方が多くいようであり、月を鑑賞する風習もあまりなかったと思われる。

両者とも『万葉集』には月を直接詠んだ歌が少ないと述べている。「直接詠む」歌がどのような歌を指すのか意味が不明瞭だが、仮に、情景として月だけを詠むことを指すのであれば、少ないと言えるのかもしれない。

一方、荻原郁子氏は、次のように指摘している。<sup>(16)</sup>

万葉集の月は既に太陽や星より抜きん出た文学的イメージを持つている。集中の一九〇首の月の歌から、人々が月を尊み慈しんでいることは月の出を待つ歌が数多いことで充分察せられる。(中略) 又、「老」と「死」のイメージを持たせたものや(一六九・三三四五)、恋しい人の面影を月に求めたり(巻六)、単に自然物の一つとしての扱いにとどまることなく万感の思いがこめられている。月に「万感の思いがこめられている」との指摘は、注目すべ



き点であろう。また、熊谷直春氏は『万葉集』について「男女ともに大らかに月を眺める歌が多くある」として、禁忌が表れている歌は「まったく見られないのである」と指摘している。<sup>17)</sup>

以上のことから、『竹取物語』研究において『万葉集』における月を考察した先行研究では、月が忌まれるものではなく、歌の題材の一つとして多様な詠まれ方がされていることを指摘している。『竹取物語』の中で、最も印象的な月の用例である「月の顔見るは、忌むこと」と重なる内容を詠んだ和歌はなく、月を忌むこと以外の点も『万葉集』と『竹取物語』に重なる表現は確認できなかった。つまり、『万葉集』は月見を忌むことを考察するための素材とはなり得ないと論じられてきたのである。しかし、『万葉集』は『竹取物語』成立前、古代の人々にとって月がどのような存在であったかを窺い知ることができる数少ない作品であることは、先行研究から理解できる。そのため、本稿では『竹取物語』の月を考えるために、改めて、『万葉集』に収載された月を詠む歌を取り上げ考察していきたい。

## 二 『万葉集』における月の詠まれ方

『万葉集』において月が詠まれている歌については様々な先行研究がある。その中でも、『竹取物語』との関連が指摘されているものに、「山部宿禰赤人の不尽山を望みし歌」がある。ただし、この歌で注目されているのは、月ではなく富士山である。

317 天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる

富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影  
も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはば  
かり 時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行  
かむ 富士の高嶺は

題詞で富士山が「不尽山」と表記されているように、歌中の「富士」も万葉仮名では「不尽」とされている。このことについて、新大系は脚注にて「竹取物語の末尾「その煙いまだ雲のなかへたちのぼるとぞ言ひ伝へたる」は、「不尽」の文字の意味をも含意していると思われる。」と指摘している。<sup>18)</sup>

『万葉集』の他の月の歌を見ると、月を表す語はいくつか



種類があることが分かる。その中でも特に「月」と「月夜」という語は頻繁に用いられている。「月夜」という語を単に「月の出ている夜」として歌の意味を考えていいのかについて、中嶋節氏と中嶋氏の論を受けた神野富一氏が論じている。中嶋氏は、「万葉集において、「月」と「月夜」はやはり区別して用いられていた」として次のように結論付けている。<sup>(20)</sup>

すなわち、人々は「月」という物体そのものを「月」として認識し、その月が清らかに照っている状態を「月夜」と表現していたと考えられるのである。

神野氏は、中嶋氏の論を肯定しつつ、「月夜」の意味について次のように述べている。<sup>(21)</sup>

それは「月神の支配する夜の世界」という神話的な観念を根拠としてもちつつ、月明かりの夜の空間、ないしはその状態を意味した。(中略) そうした空間の概念を保ちつつ、その空間の継続する時として、月明かりの夜の時という時間の概念でも用いられた。

「月」と「月夜」は区別されており、「月夜」は「月が照っている状態」や、「月明かりの夜の空間」または「月明かりの夜の時」を意味するとの指摘がされている。

以上の先行研究をふまえつつ、「万葉集」の月の歌について、以下独自に分類し考察する。「月夜」については、月に関する言葉である以上、本稿では「月夜」の歌も月が詠まれている歌として扱う。

表一 「万葉集」の月が詠まれている歌の分類<sup>(22)</sup>

(百八十九首、百九十二例)

月を詠み人物を思う	95
自然の月	56
月と海・船	9
月の擬人化	9
月の異名	8
天皇賛美	3
月を祝う・遊ぶ	3
月が空しい	3
月と日	3
月と星	1
月と富士山	1
月と闇	1
合計	192

国立国語研究所の日本語歴史コーパス(CJH)の文字列検索で、「万葉集」の月が詠まれている歌を収集し、新日本古典文学大系『万葉集』の現代語訳と『万葉集總索引 單語篇』を参考に、天体の月が詠まれている和歌を確定し、詠まれている内容で分類した。暦の月と天体の月とで解釈が分かれているものについては、新大系でとられている現代語訳を取った。

三四七六番歌については、新大系の現代語訳では暦の月が天体の月が不明確であったため、新編日本古典文学全集『万葉集』の現代語訳を参考に、天体の月に分類した。

『万葉集』の月の歌を内容ごとに分けると、月は実に様々な詠み方をされていることが分かる。逢いたい人を想うときや、美しい景物として詠まれることが多いが、それ以外にも、天皇を称えるとき、祝いの場、空しさを詠むときなど、表現する感情を問わず、様々な場面で月が用いられている。更には「月人壮士」のように擬人化もされている。『万葉集』の歌人たちは様々な感情を抱えて月を眺めており、月は様々な感情を受け止める存在と言える。

一番多い内容の「月を詠み人物を思う」は、詠まれている人を指す語によって分類すると、人を表す語も多様に使われていることが分かる。「君」「妹」「背子」「我妹子」と愛しい人を表す語や、「妻」や「児」(子どもという意味で詠まれているとは断定できないものもある)などがある。人を指す語が使われていない歌には、「恋しく思う」歌と「ひとりで居る」ことを詠む歌に分けられるものもあった。

次に「月を詠み人物を思う」歌の中で月がどのように使われているかについて、例を挙げる。

・愛しい人に例える月

495 朝日影にほへる山に照る月の飽かざる君を山越しに置き

て

・夜の光源である月

670 月読の光に來ませあしひきの山き隔りて遠からなくに

・出てきてほしい月

1008 山のはにいさよふ月の出でむかと我が待つ君が夜はふけ  
につつ

・どこにいても同じように見える月

2420 月見れば国は同じそ山隔り愛し妹は隔りたるかも

・待つ時間の長さを表す月

2667 真袖もち床打ち払い君待つと居りし間に月かたぶきぬ

このように、歌全体を見ると、月を見て誰か愛しい人を思う歌であつても、月のもつ役割は歌ごとに多様である。夜、月はいつもと変わらず輝いていっている中、詠み人は愛しい人のことを想い、それぞれの感情をこめて歌を詠んでいたため、歌を詠む状況も月の様子も様々な歌が詠まれたのではないだろうか。

「自然の月」に分類した歌についても、「月を詠み人物を思う」と同様に様々な様子の月が詠まれている。

・照る月

1082 水底の玉さへさやに見つべくも照る月夜かも夜のふけ行

けば

・出てこない月

1071 山のはにいさよふ月を出でむかと待ちつつ居るに夜そ

ふけにける

・夜を渡る月

1077 ぬばたまの夜渡る月を留めむに西の山辺に関もあらぬか

も

・清き月

2325 誰が園の梅の花そもひさかたの清き月夜にここだ散り来

る

・沈む月

3955 ぬばたまの夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月傾きぬ

夜に辺りを照らす光源であるというのは、「月を詠み人物を思ふ」に分類した歌でも詠まれており共通している。しかし、ここでは「照る月」に留まらず、月の出から月の入りまで、夜のどの時間帯であっても「早く出てきてほしい」「沈まないでほしい」と夜空にずっとあってほしいものとして詠まれている。「夜渡る月」という言葉があることから、夜の

間ずっと月を見ていて、月が動く様子が空を渡るように見えていたことも読み取れる。そして月（月夜）が清きものでもあったことも分かる。

月は夜の景物としてその様子が観察され、和歌の題材となっていたことから、古代の人々にとって、夜になると当たり前に見える身近なものであったと言えるのではないだろうか。

では、万葉歌人たちは月をどのようなものと認識していたのだろうか。

2460 遠き妹が降り放け見つつ偲ふらむこの月の面に雲なたな

びき

2669 わが背子が降りさけ見つつ嘆くらむ清き月夜に雲なたな

びき

この二首は、詠み人が「妹」や「背子」が振り仰いで月をみているだろうから、「雲なたなびき」と雲が月に隠れないことを願っている。詠み人の性別は明言されていないが、二四六〇番歌は月を見ているであろう相手が「妹」であり、「女性」の可能性が高い。そのため、「女性だから月を見てはいけない」という考えは、『万葉集』からは読み取れないことになる。また、「振りさけ見」という表現から、「月を直

接見てはいけない」という考えも表れておらず、むしろ月に雲がかかってほしくないと詠んでいる。「月の顔見るは、忌むこと」と制されたかぐや姫とは対照的である。

1039 我が背子と二人し居れば山高み里には月は照らずともよし

右の和歌は『万葉集』の月を詠む歌の中で、唯一「月が要らない」と詠んでいる歌である。この一首からしかわからないが、「二人で居れば月是要らない」という考えがあったのであれば、逆説的に、古代の人々にとって月は一人で居るときに必要なものであったと考えられる。日が沈み、辺りが暗くなる中、地上を照らす月を見て、通って来てほしいのにこない人を待っていたり、遠くにいる人を考えたり、もう会えない人を偲んでいたりしていたのだと想像できる。

2226 心なき秋の月夜の物思ふと眠の寝らえぬに照りつつもとな

右の二二六番歌は、「秋の月夜」に物思いをして「眠も寝られぬ」状態であることが詠まれている。「物思ふ」という語の使用や、「秋の月夜」が「心なき」とされているところに注目したい。「心なき」が「秋」にかかっている可能性

もあるが、「秋の月夜」であるとすれば、『竹取物語』においてかぐや姫が「いとけうらに、老いをせずなむ。思ふことなく侍るなり」と説明している「月の都の人」が連想される。

『竹取物語』の、物思いのない「月の都の人」と物思いをする地上の人という対比と似たような考えが、この歌から読み取ることができるとはいえない。つまり、これまで見てきた夜に必要とされる月ではなく、眠れない夜にこちらを照らしてくる恨めしい月、心がないように思われる月と、その月に照らされている物思う人という発想は、『万葉集』にすでに表れていると言えるだろう。

2670 まそ鏡清き月夜のゆつりなば思ひは止まず恋こそ増さめ

右の二六七〇番歌では、月が移動すると、思ひは止まずに恋が増すと詠んでいる。月を「まそ鏡」と例えていることに注目したい。「まそ鏡」が月と共に詠まれている歌はほかに六例あるが、「恋」と共に詠まれているのはこの二六七〇番歌だけである。この、月を「まそ鏡」と例えるのは、月を感じ情を映す鏡と見ているといえるのではないだろうか。前述の「月を見て物思ふ歌」があったり、『白氏文集』「贈内」で「月明に對して往事を思ふ莫れ」とされたりしていることも、

これを踏まえて考えれば、月のもつ力によって悩みが深まっていると言えるのかもしれない。

次の二首は無常を詠む歌である。

442 世の中は空しきものとあらむとその照る月は満ち欠け

しける

1270 こもりくの泊瀬の山に照る月は満ち欠けしけり人の常な

き

この二首は、表一において「月が空しい」に分類した歌である。どちらも月の満ち欠けと共に無常が詠まれている。四四二番歌は世の中が空しいものだと示すために、月が満ち欠けしているのだと詠んでいる。一二七〇番歌は月の満ち欠けから人の世の無常を考え、物思いに耽る歌である。「竹取物語」の主題のひとつとして挙げられる「無常観」<sup>(26)</sup>は、『万葉集』において月の満ち欠けと共に詠まれていることが分かる。

以上、月が人々にとってどのようなものであつたかわかる歌を五種類取り上げた。これらの歌の中には、『竹取物語』で描かれる月を連想させるものもあつた。『万葉集』において、月は他にも多様な詠まれ方をされており、見る人によって分類の仕方も変わると思う。三では、ここまで取り上げた

『万葉集』の歌に表れている月を踏まえつつ、改めて「竹取物語」の月について考察していきたい。

### 三 『竹取物語』における月とは何か

「月の顔見るは、忌むこと」の典拠については一にて論じたが、この言葉と、翁の発言「月な見給ひそ」について、『万葉集』を通して改めて考えたい。月見にまつわる二つの発言の場面を、再掲する。

かやうにて、御心を互ひに慰め給ふほどに、三年ばかりありて、春の初めより、かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人間にも月を見ては、いみじく泣き給ふ。

七月十五日の月に出で居て、せちに物思へる気色なり。近く使はるる人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがり給へども、このごろとなりては、ただ事にも侍らざめり。いみじく思し嘆くことあるべし。よくよく見奉らせ給へ」と言ふを聞きて、かぐや姫に言

ふやう、「なんでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて、月を見給ふぞ。うましき世に」と言ふ。かぐや姫、「見れば、世間心細くあはれに侍る。なでふ物をか嘆き侍るべき」と言ふ。

かぐや姫のある所に到りて見れば、なほ物思へる気色なり。これを見て、「あが仏、何事思ひ給ふぞ。思すらむこと、何事ぞ」と言へば、「思ふ事もなし。物なむ心細く覚ゆる」と言へば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物思す気色はあるぞ」と言へば、「いかで月を見ではあらむ」とて、なほ月出づれば、出で居つつ嘆き思へり。(五一頁 五二頁)

「月の顔見るは、忌むこと」は、かぐや姫が月を見始めるようになった「春の初め」に、「ある人」がかぐや姫にかけた言葉である。かぐや姫は返事をしないものの「人間にも」月を見るようになったことが分かる。

対して「月な見給ひそ」は、月を見るかぐや姫とそれを心配する翁との会話の中の翁の発言である。七月十五日、翁は、かぐや姫の「近く使はるる人々」にかぐや姫の様子がおかしいことを伝えられる。そして「なんでふ心地すれば、か

く物を思ひたるさまにて、月を見給ふぞ。うましき世に」とかぐや姫に問いかけている。かぐや姫は世の中が心細く感じられるからであつて、嘆く理由はないと答えている。しかし、かぐや姫が「なほ物思へる気色」であつたため、翁は「あが仏、何事思ひ給ふぞ。思すらむこと、何事ぞ」と聞く。それでもかぐや姫は「月の都」のことは話さず、「思ふ事もなし。物なむ心細く覚ゆる」とはぐらかす。そこで翁は「月な見給ひそ。これを見給へば、物思す気色はあるぞ」と伝える。しかし、かぐや姫はこの言葉を受けても、「いかで月を見ではあらむ」と言つて月を見る。昇天の日である八月十五日が迫っていることから、月を見ずにはいられなくなっていると考えられる。

かぐや姫が月を見ることを制する二つの発言を比べると、「月の顔見るは、忌むこと」の方が唐突な文言である。というのも、「月な見給ひそ」は、かぐや姫を心配する翁の気持ちの表れであると前後の文脈から察することができ、翁の「月の顔見るは、忌むこと」は、なぜ月の顔を見てはいけな

いのかの説明がなされないためである。また、発言者が、この場面ではか登場しない「ある人」と、物語を通して登場す

る「翁」という違いも関係しているだろう。

「ある人」の素性は物語中で明かされないため推測の域を出ないが、かぐや姫の様子を見て話しかけられる人物であることから、かぐや姫に仕える人、もしくは翁の家に入内りできる人物であると考えられる。けれども、「ある人」が現れた後、かぐや姫に仕える人として「近く使はるる人々」が登場する。「ある人」がこの「近く使はるる人々」の一人である可能性もあるが、「近く使はるる人々」より先に登場し、翁や姫とのやり取りが描かれない「ある人」は、仕えている人というよりは翁の家に入内りできた人物とも考えられよう。そして翁の家に入内りする必要がある人物として考えられるのは、帝とかぐや姫のやり取りを取り次ぐ人である。

そのように考えると、「ある人」は、「野山にまじりて竹を取」って生計を立てていた「翁」とは異なり、都の貴族であり漢籍の教養もある人物だと想像できる。教養のある人物であるからこそ、『白氏文集』『贈内』をふまえつつも、より強い禁忌として「月の顔見るは、忌むこと」という発言が可能だったのではないか。『万葉集』に詠まれる月を見る用例を考えると、「月の顔見るは、忌むこと」の発想源は『万葉集』

とはいえない。作者は正体不明の「ある人」に「贈内」の影響が認められる発言をさせたのである。

一方、翁の「月な見給ひそ」は、続けて「これを見給へば、物思す気色はあるぞ」と、月を見ないで欲しい理由が語られ、月を見ると、物思いに沈んでしまつとしている。『万葉集』の月を見て物思ふ歌を踏まえると、翁は『万葉集』における月のあり方を踏襲しての発言だったといえる。

次に、月見を続けるかぐや姫について見ていきたい。かぐや姫は、「ある人」や「翁」から月を見るなと言われても、なお月を見続けており、月を見るかぐや姫の姿は強調されている。また、月を見ているかぐや姫の様子も、昇天の日が近づくに從つて変化する。

「春の初め」のかぐや姫は、月を見て「常よりも物思ひたるさま」である。「ある人」に月見を止められても「人間にも月を見て、いみじく泣き給ふ」様子であった。「七月十五日の月」に対しては、「せちに物思へる気色」となる。この頃になると翁に「月な見給ひそ」と言われても、隠れて見ることはせず、「なほ月出づれば、出で居つつ嘆き思へり」と描写される。「八月十五日ばかりの月」が出ると、かぐや姫



は「いといたく泣き」、昇天しなければならぬことをとうとう翁たちに明かす。以上のことから、かぐや姫は昇天の日が近づくにしたがって、人目をはばからず月を見ており、嘆きも深まっていることがわかる。

一方、かぐや姫のように月を眺めるのは、『万葉集』の月の歌において最も多く詠まれる姿である。かぐや姫が月を見て思い悩むのは、『万葉集』と共通する姿であり、人間らしい姿と言える。つまり、『竹取物語』に登場する人物の中で、ただ一人月を眺める姿が描写されるかぐや姫は、この点において、月の都の人でありながら最も人間らしいと言える。先行研究ですでに指摘がされている、かぐや姫の感情の獲得とも重なるであろう。<sup>27)</sup>

このように、月を眺め物思う姿は共通していたが、物思いの内容はどうかであるうか。『万葉集』では、月は遠くの逢いたい人を想うときに共に詠まれている。山を隔てて遠くにいる人を想う歌を次に挙げる。

- 2420 月見れば国は同じそ山隔り愛し妹は隔りたるかも  
 4073 月見れば同じ国なり山こそば君があたりを隔てたりけれ  
 4076 あしひきの山はなくもが月見れば同じき里を心隔てつ

月はい前いた国・里と同じであるのに、逢いたい人とは山を隔てて離れてしまったと詠んでいる三首である。自分のいる場所は変化しても、月が変わらず見えるという対比がなされている。遠くにいる人を月を見て想う姿は、『白氏文集』にも表れている。

『白氏文集』 卷十四 724 「八月十五日夜、禁中に獨り直し、月に對して元九を憶ふ」

銀臺金闕夕沈沈 銀臺 金闕 夕に沈沈たり、  
 獨宿相思在翰林 獨宿 相思うて 翰林に在り。

三五夜中新月色 三五夜中 新月の色、

二千里外故人心 二千里外 故人の心。

渚宮東面煙波冷 渚宮の東面 煙波冷かに、

浴殿西頭鐘漏深 浴殿の西頭 鐘漏深し。

猶恐清光不同見 猶ほ恐る 清光同じく見ざるを、

江陵卑濕足秋陰 江陵は卑濕にして 秋陰足る。

白居易が月を見ているとき、第四句の遠く「二千里外」にいる友人の元稹も同じ月を見ていてほしいとしているところに注目したい。先ほど挙げた三首と同じように、遠くにいる人を想って月を見ているが、この漢詩では更に同じ月を見て

いて欲しいという心情が読み取れる。

遠くにいる人も自分と同じように月を見ていて欲しいと詠む歌は、『万葉集』でも確認できる。二にて、『月が見たい歌』に分類した次の一首である。

2460 遠き妹が降り放け見つつ偲ふらむこの月の面に雲なたな

びき

『万葉集』と『白氏文集』では、月を見て遠くにいる逢いたい人を想う姿がみられる。対してかぐや姫は自身の帰るべき場所である月の都を見ている。しかし、そこは帰りたい場所ではない。『万葉集』や『白氏文集』では、夜になると、月を見て遠くにいる人を考えている。物思うのは、逢いたい人がそばにいないからである。しかし、かぐや姫にとっては、仰ぎ見ている月そのものが物思いの原因である。一見すると、月に遠くの人を想うのと、帰るべき場所を見るのでは、態度が異なっているように見える。

かぐや姫が翁に書き置いた文では、月に帰りたくない理由が語られている。

この国に生まれぬるとならば、嘆かせ奉らぬ程まで侍らで過ぎ別れぬること、かへすがへす本意なくこそ覚え侍

れ。脱ぎ置く衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ。見捨て奉りてまかる空よりも、落ちぬべき心地する。(六〇頁 六一頁)

かぐや姫が地上から離れたくないのは、翁・姫を「嘆かせ奉らぬ程まで」共にいられないことが理由であると読み取れる。つまり、かぐや姫が「春の初めより」月を見て嘆いていたのは、近い未来、八月十五日に月の都から迎えが来てしまったら、翁・姫を置いて行かなければならないからである。空に浮かぶ月を見て考えていたのは、今はまだ共にいるが、もうすぐ遠くの人となってしまう、翁と姫のことだったのである。『万葉集』と『白氏文集』で現れる、月を見て「遠くにいる人」を想い、同じ月を見ていてほしいという考えは、『竹取物語』のかぐや姫には「近くににいる人」を想う形で用いられている。『万葉集』や『白氏文集』での表現が反転して用いられていると言える。

次に、かぐや姫の翁・姫に対する最後の願い「月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ」について考える。かぐや姫は手紙を書く前に、「昇らむをだに見送り給へ」と翁にお願いしている。しかし、心乱れて泣き続ける翁は、「何しに、悲しき

に、見送り奉らむ。われを、いかにせよとて、捨てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね」と答える。願いを叶える約束はとてできない翁に書き置いたのが、前掲の手紙である。

かくや姫は、翁たちを置いていくことについて「見捨て奉りてまかる空よりも、落ちぬべき心地する」とまで表現している。翁たちを置いていくことは、「見捨て」ることであり、それを思うと天空から落ちてしまうほどの気持ちでいるのである。迎えが来てしまった今、月の都へ帰らなくてはならないと理解しているが、それでもなお翁・姫と別れたくないと強く思っていることが読み取れる。このような心境のかくや姫が翁たちに最後に願ったのは、「脱ぎ置く衣」を形見として、月が出た夜には自分を思つて月を見て欲しいというものであつた。今、昇天の見送りができないならば、離れ離れになつた後でいいから月を見上げて欲しいのである。

「脱ぎ置く衣」を形見とするのも、月を見て欲しいというのも、私（かくや姫）を忘れないで欲しいという願いだと解釈できる。天の羽衣を着てしまえば、自身は地上の人とは「心異になる」とかくや姫は理解している。自分は翁たちのことをこれまでと同じように想ふことはできなくなるが、翁

たちには、地上にいた時の衣を持つていて欲しいのである。そして、月が出たら、遠くの人となつてしまった私を想つて見て欲しいのである。しかし、かくや姫の最後の願いは叶えられない。

かくや姫が昇天した後の翁と姫の様子は次のようである。

その後、翁、姫、血の涙を流して惑へど、甲斐なし。

あの書き置きし文を読みて聞かせけれど、「何せむにか、命も惜しからむ。誰がために。何事も用なし」とて、薬も食はず、やがて起きも上がらず、病み臥せり。（六

### 三頁）

翁と姫は、文を読み聞かされても、「何をしても意味はない」と言つて、病み臥せつてしまったことが分かる。形見の衣については触れられず、月を見ている様子もない。もし、書き置かれた文が「恋しからむ折々、取り出でて」見られて、翁・姫が月を眺める姿が描写されていたならば、それは、『万葉集』と似た状況であると言えたであろうが、そのような本文はない。やはり、月を見るのはかくや姫だけである。

かくや姫に月の都から迎えが来ると知つた翁は「われこそ死なぬ」といつて、その嘆きを表現している。翁たちにとつ

て、かぐや姫が月の都へ帰るということは、かぐや姫の死と同義であると読み取れる。そして、本当にかぐや姫がいなくなる、翁は生きる意味を失っていることが、昇天後の翁たちの様子から分かる。このような状況で月を見るといつのは、もう会うことができないかぐや姫を徒に思い出すだけであつて、ただ辛い気持ちを増幅させる行為に過ぎないのである。

『白氏文集』『贈内』にて、物思いをしながら月を見てはいけな  
いと言われていることも重なるであらう。

『竹取物語』では「春の初め」で初めて月が描かれると同時に、「ある人」が「月の顔見るは、忌むこと」と月見を制する。この制止の発言により、月は地上の人が見てはいけな  
いものであると、最初から読者に印象付けていると言えよう。そして、最後までかぐや姫以外は月を見ない。翁たちが月を見ないことで、『竹取物語』の月は、一貫して地上の人は見られないものとなっているのである。翁・姫が月を見ないのは、かぐや姫への思いの強さの表れであると同時に、月見を禁ずる『竹取物語』独自ともいえる地上の論理が適用されているとも考えられる。

翁たちはかぐや姫の願いであつても、地上の論理から逃れ

られなかった。対して、かぐや姫は月の都の人であるから、地上の論理を超えて月を見た。しかし、かぐや姫も月の都の論理は超えられない。月の都の人が降りてくる直前、返り討ちにしようと思ひ込む翁に対して、かぐや姫は、地上にいる期間の延長を申し出たが、許されなかったことを明かしている。月の都の人が決めたことは絶対なのだと翁に分かつてもらうための発言であらうが、そのような月の都の論理には、かぐや姫であつても従わざるを得ないのである。

かぐや姫は、月を見て、地上にまだ留まりたいと願つたが許されなかった。昇天の時には見送りを希望したが、翁は泣き伏せていて、とても見送りできる状態ではなかった。昇天後でかまわれないから、月を見て欲しいと書き置いたが、それすらも叶えられなかった。月をめぐるかぐや姫が切望したことは、何一つ叶えられなかったのである。

## おわりに

以上、『竹取物語』における月について、先行研究や『万葉集』を踏まえて考察した。「月の顔見るは、忌むこと」に

つては、先行研究によって、民間信仰説と中国由来説の二つが確立されており、その両方の影響は否定しきれないが、「忌む」と強い言葉で月見を禁じたのは、『竹取物語』のオリジナルであると考える。『万葉集』における月の詠まれ方を確認すると、『万葉集』において月は様々な詠まれ方がされており、忌む歌はなかった。最も詠まれた内容は、月を見てそばにいない人を想うものであり、『万葉集』の詠み人たちは、月を積極的に見ては違いたい人のことを考えていたことが分かった。そのうえで、『万葉集』を踏まえて、『竹取物語』における月がどのようなものであるかを次のように読み解いた。

月を眺め大切な人を想うのは、『万葉集』とかぐや姫で共通しており、月を見するという行為においては、かぐや姫だけが『万葉集』の時代から現代まで変わらずあり続ける、人の普遍的な姿で描かれている。それにもかかわらず、『竹取物語』は一貫して月は見えてはいけないものとして描いており、かぐや姫だけが月を見ることができるのは、地上の論理に縛られない月の都の人であるからである。

『竹取物語』研究において『万葉集』は、『竹取の翁』が登

場する歌の関連が指摘されたり、『竹取物語』に登場する語が『万葉集』ではどう詠まれているのか確認したりする程度で、これまであまり重視されてこなかったのではないだろうか。『竹取物語』が現存最古の物語とされる以上、他の物語作品と比較して、『竹取物語』が与えた影響は論じられても、『竹取物語』を読解するための根拠とするのは難しい。『万葉集』は『竹取物語』成立以前の人々の営みを今に伝える、貴重な文学作品である。本稿では、『竹取物語』の月について考察したが、月に限らず、様々な観点を考察するにあたって、『万葉集』との共通点・相違点を見ることが、『竹取物語』のより深い読解に繋がるのではないだろうか。

#### 注

- (1) 国立国語研究所の日本語歴史コーパス(CHJ)の文字列検索で、『竹取物語』に「月」が二十八例ある事を確認した。そのうちの十七例が天体の月であった。国立国語研究所(二〇三)『日本語歴史コーパス 平安時代編 仮名文字』<https://crd.ninjal.ac.jp/chj/neian.html#kanabungaku> (二〇一三年十二月一日確認)。なお、『竹取物語』の引用は室伏信助『新版竹取物語 現代語訳付き』(角川ソフィア文

庫 二〇〇一年)による。

- (2) 三谷栄一『竹取物語評解「改訂版」』(有精堂出版 一九七三年)。なお、引用文中の「白文集」は、『白氏文集』の事である。

- (3) 三谷氏と同様に、松尾聰『評註竹取物語全釈』(武蔵野書院 一九七三年)では、「当時は、月を見るのを忌む俗信があつたらしい。清浄すぎるものに靈威を感じたのであろう」といし、上坂信男『竹取物語全評釈(本文評釈編)』(右文書院 一九九九年)も「当時月を見るのを忌む習慣があつたらしい。月が清浄すぎるのが、忌む最大理由である」とする。加藤幸恵『竹取物語考 かぐや姫と月伝説』(九州大谷国文 第十一号、一九八二年七月)は、『日本書紀』や収集した俗信を根拠に、「このように月は、この時代の人々にとって、恐るべき対象であつたということが推測される」とする。三浦真貴『月を忌む その源流』(『瞿麦』二十一号 二〇〇六年十二月)では「月の顔見るは忌む」は、古代からの月を死の世界と見る信仰からであろ」とする。

- (4) 月経との関連から女性が月を見ることを忌む考えについて、市村宏「月の顔は見るを忌むこと」(『和歌文学の世界 第一集』笠間書院 一九七三年)が「月の顔は見るを忌むこと」という諺は、白氏文集がわが国に渡るよりもずっと古い上代からの伝承で、もともとは「月経中の女性の顔は見るを忌め」というにあつたのではないかと思う。」と述べるが、熊谷直春「月の顔見るは、忌むこと」私考」(『芸文東海』

一号 一九八三年六月)で、次のように反論されている。

市村氏は、「月の顔見るは、忌むこと」は、本来「月経中の女性の顔は見るを忌め」に由来し、王朝時代に伝えられたが、その本来の意味、殊に月の意味の一つが忘れられ、空に照る月しか考えられなくなつたと言われる。そのような由来であるならば、「月の顔見るは、忌むこと」は、女性ではなくて男性に適用されていいはずであるが、第四章で述べるように、男性は盛んに月を眺めているし、「竹取物語」のかぐや姫の例でわかるように、俗信としての禁忌は女性に適用されている。したがって、市村説は、この事実からしても納得しがたいのである。前掲注(3)三浦氏も、熊谷氏の論を肯定しており、月経との関係は否定されたといえよう。

- (5) 『白氏文集』の引用は、新釈漢文大系『白氏文集(三)』(明治書院 一九八八年)による。

- (6) 前掲注(4)、熊谷氏の論に同じ。

- (7) 倪錦丹「竹取物語の物語性 「月」をめぐる」(『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書 二〇〇九年三月)

- (8) 前掲注(3)、三浦氏の論に同じ。

- (9) 前掲注(5)所載、「内に贈る」の余説にて、「作者未詳『竹取物語』に、「翁月な見給ひそ、これを見給へば物思すけしきはあるぞといへば、いかでか月を見ずてはあらむとて、なほ月出づれば出てあつゝ嘆き思へり」と。」と、『竹取物語』



に触れられている。注目したいのは、引用された本文が「月の顔見るは、思むこと」ではなく翁の発言「月な見給ひそ」であることだ。「竹取物語」研究では、月を「思む」ことの根拠として一番に挙げられる詩だが、「思む」という語が漢詩では使われていないためか、「新釈漢文大系」では「思むこと」との関わりを指摘していない。

なお、日本古典文学大系（『竹取物語』の校注は坂倉篤義、岩波書店 一九五七年）では、「現在北方民族の間にも、月光を顔に受けたままで寝ることを非常に思む風習があるそうである。」と指摘する。この指摘を受けて、神田秀夫氏「月の顔見るは思む」ということについて（『日本古典文学大系月報』十一 一九五八年三月）は「白楽天の先祖の地は山西省太原府だから「北方民族」の風習は入りこみ易い隣接地である。（中略）「月明ニ対シテ往時ヲ思フコト莫カレ、君ガ顔色ヲ損ジ、君ガ年ヲ減ゼン」という詩句そのものが、或は阪倉氏のいわれる「北方民族」の風習を受けての発想かもしれないのである。」とする。また、李家正文「月見を思む思想について」（『國學院雑誌』第八十七巻第七号 一九八六年七月）は、「贈内」への仏教の經典の影響について考察し、「白氏文集」の「贈内」の詩だけで単純に、「竹取」の出現とみることは、安易過ぎはしないか。この思想は、中国よりも西域のもので、仏典を通じて日本へ伝わったと見る方が、適切妥当と思うが、いかがなものであろうか。」とする。

(10) 大井田晴彦『竹取物語 現代語訳対照・索引付』（笠間書

院 二〇二二年）

(11) 奥津春雄「中秋名月と『竹取物語』」（『早稲田実業学校研究紀要』第四号 一九六九年十二月）

(12) 『万葉集』の和歌の引用は、新日本古典文学大系『萬葉集』一～四（岩波書店 一九九九年・二〇〇三年）による。

(13) 高橋亨「竹取物語と漢詩文 月をめぐる」（『國文學解釈と教材の研究』第三十八巻 四号 一九九三年）

(14) 前掲注（3）、加藤氏の論に同じ。

(15) 山下春美「『竹取物語』における月」（『竹取物語探求』一五号 一九八四年二月）

(16) 荻原郁子「竹取物語の月のもつ意味」（『日本文学ノート』十一巻 一九七六年二月）

(17) 前掲注（4）、熊谷氏の論に同じ。

(18) 『万葉集』における「月」についての論文に以下のものがある。戸谷高明「万葉景物の一考察 月と月夜と」（『早稲田大学教育学部学術研究 人文・社会・自然』第九号 一九六〇年）、石畑和代「古典における月と抒情」（『東洋大学短期大学論集日本文学編』十六集 一九八〇年三月）、大高円「万葉集における月と日について 天体の月と日」（『国文白百合』十五号 一九八四年三月）、御厨公子「萬葉歌人の表現法 月齢による心事」（『福岡大学日本語日本文学』五巻 一九九五年十二月）、仲谷健太郎「万葉集」における月の擬人化表現」（『百舌鳥国文』巻三十 二〇二二年三月）

(19) 新日本古典文学大系『萬葉集 一』（岩波書店 一九九九年）



- (20) 中嶋節「『万葉集』における「月」と「月夜」について」  
 (『愛媛国文研究』三十八号 一九八八年十二月)
- (21) 神野富一「『月夜』考」(『上代文学』第八十三号 一九九九年十一月)
- (22) 前掲注(18)、戸谷氏の論文内の表「万葉集における出度状況」を参考にした。この表では、月の用例は百九十例となっている。本稿の表1では、一二九四番歌「朝月日」と三四七六番歌「立と月」の二例を足して百九十二例と数えた。
- (23) 国立国語研究所(二〇三三)『日本語歴史コーパス 奈良時代編 万葉集』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/nara.html#manyo> (二〇三三年八月三日確認)
- (24) 正宗敦夫『萬葉集總索引 單語篇』(平凡社 一九七四年)
- (25) 新編日本古典文学全集『萬葉集』(小学館 一九九五年)
- (26) 関根賢司「竹取物語論 神話／系譜学」(おうふう 二〇〇五年)の異郷論において、「死の起源、天と地の断絶、浄土と穢土との切り裂かれた緊張関係を描いた物語の、作者のまなざしは、雲の中へ立ちのぼる煙のゆくえを追いながら、しかし、雲の彼方から、この人間界の、奇妙な風景を見すえようとしているのだ。厭離すべき、無常の、不浄の相として。」としている。
- (27) 奥津春雄『竹取物語の研究 達成と変容』(翰林書房 二〇〇〇年)において、「つまり、作者が描き出そうとしたかぐや姫の理想性の内容は、天上の超越性と、光り輝く美貌と、人間的な情愛であったと考えられる。」と述べている。
- (28) 169 「万葉集」には死者を想って月を見る歌もある。  
 あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく  
 惜しも(日並皇子の尊の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂の  
 作りし歌一首)  
 211 去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離る  
 (柿本朝臣人麻呂の、妻死して後に泣血哀慟して作りし  
 歌一首)  
 (中京大学文学部日本文学科在学生)